

●平成28年度一般選抜後期日程についての講評等

【後期試験の基本的な姿勢】 宮崎公立大学国際文化学科が行う「総合学力試験」として、以下の3点を念頭において作題した。

- 1 地域社会が直面する国際的・文化的かつ現代的な内容を取りあげる。
- 2 内容の正確な理解に加え、得られた情報を活用して的確に判断する能力を問う。
- 3 自らの体験・価値観や具体的情報・知識を活用しつつ、合理的な評価並びに妥当な判断を「小論文」として説得的に表現・展開する技能と態度を問う。

問1

下線部の次の段落を読めば容易に解答できる問題であるが、半数以上の受験生が不正解であった。理由として、語彙力不足による誤訳が考えられる。受験生の多くが low, birthrate, humanities を誤訳していた。例えば、low を「法律」、humanities を「人間性」と訳していた。humanities に関しては、4ページの注を読めば理解できたはずである。

問2

半数近くの受験生が不正解であった。理由としては、問1同様語彙力不足が考えられる。administration, strategy, programs, enhance, competitiveness 等が誤訳されていた。例えば、administration を「教授」、strategy を「悲劇」、programs を「問題」と誤訳していた。

問3

文頭の True は形容詞であるが、副詞のように「確かに」と訳すこと。それに続く文は第2文型 S V C で、決して難しい英文ではない。S は one から universities まで、V は is、C は to try から promotion までと考えること。S の one of... は「...の1つは」と訳すが、これができない受験生が3割ほどいた。C の to 不定詞は名詞的用法（～すること）なので、is to meet demands は「要求を満たすように・需要に応えるように努めることである」と訳す。日常の学習と受験の準備をしっかりとやっていれば、大きなミスをすることなく解ける問題である。

問4

これも第2文型 S V C の英文である。S は Academic から values まで、V は is、C は of から importance までと考えるとよい。S の中に関係代名詞が使われていること、また to は原形動詞の look だけでなく、and で結ばれた encourage と関係していることに気づくことが重要である。英語の実力の差が出やすい問題なので、結果的に点数の差が生じた。また、is の後の of crucial importance は crucially important を表す表現なので、「決定的に重要で(ある)」と訳すこと。これらをきちんと理解している受験生は2割ほどであった。

問5

This は間近にあることを指し示す語なので、But if から home までの内容を説明すればよい。ただ、national を「国際的な」と訳している受験生が少なからずいた。国際文化学科を

受験しているのに、international と区別ができないのは嘆かわしい。course を「コース」とカタカナ表記をした受験生が4割ほどいたが、語句の意味をきちんとわかっているということが採点者に伝わるような答案を作成すべきである。また、away は単に「遠くに」という意味ではなく、「離れてしまって、直ぐには戻れない」位置や状態を表す。pass away が die と同じ意味を表す所以である。したがって、「地元・実家から（遠く）離れて（地元の国立大学とは別の）大学へ行くことになる」ということである。自宅から遠くにある大学でも通学はできるかも知れないが、ここに書いてあるのはそれより厳しい状況である。

以上、問1～問5は、下線部や問題文中にヒントがあり、本文を正確に理解してそのポイントを押さえながら読み解くことが試されている。英文のなかから情報を正確に読み取るためには、① key word に気をつけながら英文に目を通す、②英文を速く読む力（語彙の知識、構文に関する知識）をつける、③普段から簡単な英文を多読する、の3点が大きなポイントになる。

## 問6

小論文問題文1をふまえて、意見の対立する問題文2と問題文3をそれぞれ読み比べ、その内容を正確に理解するとともに、自分なりの意見・主張を説得力のある文章で表現することを試した問題である。どちらも「朝日新聞」に掲載された「争論」で、大学で「重視すべきは学術か実学か」「身につけるべき教養とは」「大学は何のためにあるのか」を、経営コンサルタントの富山氏と、日本近代文学・文化や移民文学を研究する名古屋大学准教授の日比氏の意見を対立した形で読ませた。以下、採点しながら気づいた点をいくつか述べたい。

一番多かったのが、「学術」と「実学」の基本的な定義をしないままに、両者の優劣を判断している論述だった。そのため前半部分では「学術」の重要性を指摘しながら、後半では「実学」を重視すべきという内容に変わってしまったものが多かった。例えば、「何が正しいかささまざまな角度で考え、必要な情報を選択する力は文系学部で身につけることができる」と「学術」重視を強調しながら、結論は「だから大学で重視すべきは実学である」となっているのである。考えの異なる問題文の筆者の考えを「つまみ食い」する結果、矛盾する内容の文章になってしまったと考えられる。

論文・小論文において何らかの主張をするには根拠が必要であり、これが感想文等とは異なるところである。ところが、「実学を学ぶ方が日本の要求に合う人材を育成できるに違いない」とか、「実学ばかり学んでも社会が発展することはできない」、「大学を卒業して社会にでた時は、知性だけでは役に立たない」などと断言するなど、根拠がなく個人的な印象を述べているに過ぎないものや、身近な経験を引き合いにした感想文、大学でこのように学びたいという決意表明に留まっているものがみられた。これらの意見はまったく説得力がなく、大幅減点の対象になった。

また、相異なる両氏の考えの「折衷案」として、「学術」と「実学」を分けることは意味がないとか、どちらも大切であるなどの意見も少なからずあった。明確な判断を避け無難な意見でコンパクトにまとめているが、それだけ自分の意見がパワーダウンしてしまった結果、説得力に欠ける文章になった。

問題文の引用等はなされているものの、どこからどこまでが問題文に書かれてある内容で、どこからが自身の主張であるのかの線引きが明確でないものがみられた。なかには問題文を誤読しているもの、問題文に書かれていることを答案のなかで再構成しているだけのものもみられた。このほか、どちらの意見を支持するかが明確でないものや、「英語コミュニケーション力が何より重要」として、英語の重要性についての持論を展開したものもあった。その一方で、

問題文2で言われている現代における「知の技法」が果たして著者の述べるようなものなのか、あるいは大学における学術と実学は相互補完的なものではないか、といったオリジナリティのある主張を、問題文を踏まえておこなっているものもあった。

この設問は、問題文を踏まえたうえで3つの問いに答えることを求めている。問題文をまずまとめたうえで個々の問いに答えるとしても、単純計算して一つの問いに充てることのできる字数は（問題文の要約・紹介等も含めて）平均260字から270字程度である。すなわち、解答用紙のマス目には、必要最小限のことのみにしぼって記述しなければならない。しかし、前置きが長いなど、無駄な記述にマス目を費やしている答案も見られた。とくに前半に、不必要なことが書かれている傾向があった。問題文にはどちらかということ文系の学問の世界のことが書かれているが、字数が限られた答案用紙に、文系・理系両方のことを書いたため、混乱を来しているものもなかには見られた。

文章表現については、一文が長くなる傾向が見られた。また小「論文」ということで、もってまわった表現をしないといけないと誤解しているのか、「のである」という言葉を（その述語でその文を完結させることができるにもかかわらず）述語の後につけているなど、冗長な表現が見られた。文と段落については、一つの内容で一つの段落を作るとともに、文と文、段落と段落の繋がりを意識して記述すべきであるが、余りなされていなかったように思う。

なお、「学述（術）」「一朝一石（夕）」などの誤字や不正確な送り仮名の使用、「美術」といった「造語?」もあった。不正確あるいは不自然な日本語表現の使用、原稿用紙の間違った使い方をしている答案が約半数見られた。平素より国語の学習を大事にするとともに、本や新聞を読むことを通して、正しい日本語を学んでほしい。